

# 東

京二三区

佐藤成行

「東京二三区」は東京の土地勘を探りたい研究室。研究員の佐藤（成）がひとりでもヤモヤヤしつつ。研究室と名乗ることでアンテナを張りつづける。

東京二三区研究室は、東京二三区の都市の構造を理解する方法（土地勘の身につけかた）を研究する研究室です。ただ、やりたいことをうまく言葉にできず、説明できないモヤモヤを抱えています。

言葉にできなかつたがゆえに、なにから手をつけていいかわからず、活動はWEB上の色々な地図データを集めるだけでほぼ終わってしまいました。ただ三年目の秋に小さな、しかし幸運な出会いがあり、その霧が晴れ、そして言語化できるようになると同時に、途方もないことに手をつけようとしていたのだということに気がつきました。

## 研究室設立に至るまで

初年度に行われたバスリサーチと、そこから実施される予定だったバスの企画は、公演を企画していく段階で消えてしまいました。企画を出し合ったときにトップダウン型の組

織の悪い部分が出て、ベテランと若手の間が一瞬ギクシヤクしてしまったせいだと思っています。バスの企画自体はとてもよいものだと感じていました。

「バスのリサーチ先に板橋区の「りんりん号」というのがありました。僕はリサーチで初めてこのバスを知ったのですが、その路線は僕にとっては近道となるようなルートで走っていました。コミュニティバスは一般的に色々な場所を巡るため遠回りになることが多いので、地味ですが珍しい特徴です。学生のころ、国際興業バスの定期券を使って、あちこち行くのにバスを利用したルートを開拓していたのを思い出しました。移動のルートを考えるのは学生のころから好きなことでしたが、これは電車オタクやバスオタクとも違うと感じていました。ある場所とある場所を「移動」でつなげていき、その間に感じることができる場所同士の意外なつながりを発見することや、「移動する人」の営み（移動の仕方も「最安・最短・最楽」以外に色々あって、そのルートを使うであろう人のニーズを考える）というようなことに楽しみを見出していました。

二三区研究室は東京を二三区スケールで見えていく、東京の土地勘をつけていく方法を探すというスタンスでスタートしました。こうしたリサーチは、ある地域を取り上げて深掘りしていくものが多いと思いますが、浅くなってもできるだけ広い地域を扱いたいと考えていました。自分に馴染みがあって（なにより自分自身がより土地勘を身につけたくて）

ギリギリ扱えそうな広さというと、東京二三区ではないかと考えました。

### 二三区研究室のモヤモヤが晴れるまで

とにかく最初は、小学校の地理の授業でやったような白地図とそこに情報（調べて足を運んで気づいたこと）を書き込んでいくのはどうか、ということを考えていました。色々なデータが集まったらそれをレイヤーで分けてみて、土地勘をつけるのに役立つかもしれないと思いました。しかし作業量に二の足を踏んでいるうちに断念してしまいました。

二年目が始まってまもなくのころ、あまりに多くの研究室が立ち上がったため、研究員の大川原がいくつかの研究室の統合を提案しました。そのときピックアップされていたのが二三区研究室・土地の記憶研究室・団地研究室です。結局、土地の記憶研究室が強クノーを突きつけたことでこの件は流れましたが、それぞれの研究室でやっていることが、外から見ると非常にわかりにくく、また明確に説明できていないことがわかる出来事でした。もし三研究室で会って話すことができたら、相対的に二三区研究室の位置づけが見えてきたかもしれません。

いつかの開室日（研究所内の漠然とした集まり）に長島と話していて気づいたことなのですが、情報をいつでもツールを通じて引き出せること（アプリやインターネットの路線

検索など、もろもろ」と、情報が頭のなかに入っている状態とでは、応用力が全然違ってくる。このことが「土地勘」の正体なのかもしれないという予感がしました。

また二年目の秋頃、研究員の朝比奈から、彼の予備校時代の世界史の講師の話が聞きまされた。世界史を理解するためには世界地図を理解する必要があるですが、その先生が用意した地図は一般的な世界地図ではなく、だれでも描くことができるように簡略化した世界地図なのだそうです（ちなみにこの世界地図はつくりかたの思想史研究室のブックガイドの表紙に使われています）。

実際にこのロジックで、川と道路を参考に、簡易的な二三区地図を描いてもらいました。しかしこれでは二三区を理解したことにならないと感じました。描き上がった地図よりも「描き方」が大事だからでしょうか。世界地図なら捨てるべき地形と捨てるべき地形を選定しやすいのかもしれない。あるいは簡略化する際に、選んだ指標が間違っていたのか、それとももっとディテールが必要だったのか、わからないままでした。

二〇一五年（つくりかた研究所三年目）の秋に、「空想地図」をつくられている地理人（今和泉隆行）氏の展示『中村市万物収集展』が東京・谷中のHAGISOで開催されました。地理人氏がつくられて公開している架空の都市「中村市」と、そこから二次創作で生まれた中村市のさまざまなもの（紙幣や時刻表、まちの鳥瞰図、不動産案内など）が展示されて

おり、僕は一鑑賞者として足を運びました。地理人氏はこの中村市の地図を制作するとき「すでに存在している架空の中村市を読み取るように、地図に起こしていく」というようなことをキャプションに書いていました。中村市を二三区に置き換えると腑に落ちたように感じます。ずっとうまく説明できなかったこと、自分の頭のなかで言葉にならなかったモヤモヤが少しだけクリアになりました。まちができてあがる時間的な流れや、そこに住んでいる人の暮らし、地理的・交通的なつながり、景色といったことを多角的に捉えていかなければならない。それが最低ラインで、二三区スケールでやるのはとても大変であることがわかりました。同時に二三区がまるまる自分のなかに土地勘として入ってくるこの魅力も『中村市万物収集展』で感じました。

やろうとしているモヤモヤを少しクリアにできたことで、少しですが先に進むことができます。これだけ時間をかけてようやくスタートラインに立ったわけですが、「研究室を立ち上げる」というかたちでアンテナを張っていたおかげで土地勘の正体の話や、朝比奈の簡易地図、なにより先人である地理人氏に行き着くことができました。時間もかかりましたし、端から見たらなにも進んでいませんが、自分のやろうとしていることがなんなのか、それとおそらく最初の一步の踏み出したことを知ることができたのはよかったです。